

### 「少年の日の思い出」の主題に関わる疑問(不可思議な点)についての考察

ここでは、「なぜ、僕はちょうを粉々に潰してしまったのか?」といった枝葉末節な、利他的な疑問についてではなく、本質的な主題に関わる疑問点について述べておきたい。

#### ①現在の場面の存在(現在の場面で始まり、回想の場面のまま終わる構成)

書き出しのところは、現在の場面であって、「私」がこの場面の主人公。

主題が「一度起きたことは、もう償いのできないものだと思った。」から後悔・反省・戒め・教訓といったものならば、現在の場面がある必要もない。「僕は、八つか九つのとき、ちょう集めたを始めた。」という回想の場面から、「僕」を主人公として、書き始めれば済むのではないか。

あえて、現在の場面を先に入れたのは、何かの意図があったのではないと思われる。しかし、現在の場面を入れ、そこから話が始まっていくにもかかわらず、回想の場面を経て、現在の場面に戻ることもなく、回想の場面のまま終了してしまうことは、いっそう現在の場面の必要性に疑問が投げられることだろう。

これには何らかのからくりがあると思う。

主題を見つめるにあたり、まず、読み手である我々は、現実の場面の「私」が作者ヘルマン・ヘッセなのだろうと思う。ところが、回想の場面に移ると、「僕」(現在の場面の「客」)こそが作者ヘルマン・ヘッセなのだと思ってしまう。回想場面の「僕」が作者を描いたものならば、前述したとおり、現在の場面の存在理由はない。では何なのか? 思うに、主人公(作者が投影された者)をひとつに(一人の登場人物に)限定させないためだと考える。自分が投影された人物を一人の登場人物に固定化しない役割である。つまり、「私」も作者を映す姿であり、「僕」も作者を映すもうひとつの姿なのではないかということである。こう考えると、現在の場面－回想の場面－現在の場面といったありがちな構成になくとも、視点というか基準となる自分は現在・回想のどちらの場面にも存在するのだから、あえて現在の場面に戻さず、尻切れトンボの形でいいとしたのではないか、と思えてくる。

#### ②エーミールを悪い印象として、読者が受け取る書き方

最近の学校教育の中では、エーミールと僕の立場に分けて、ディベート形式で論議することもあるようだが、「この少年は、非の打ちどころがないという悪徳をもっていた。それは、子供としては二倍も気味悪い性質だった。」や「エーミールは、激したり、僕をどなりつけたりなどはないで、低く『ちえっ。』と舌を鳴らし、しばらくじっと僕を見つめていた」などからわかる通り、読者が、「陰険で冷徹で相手を理解しようとしないう大人びた嫌な奴」といった印象を受け取ることは否めない。むしろ、そう捉えるべく書いているようでもある。

頭ごなしに、決めつけて、相手を理解しようとしないう姿勢。少年の日の思い出の中におけるエーミールに見て取れる態度である。ヘッセの生涯をみるにつけ「頭ごなしに、決めつけて、自分を理解しようもしない教師や大人、社会に対する反発」こそが、ヘッセの描かんとしたこと、主題だと見えてくる。主題は、「自分が犯してしまったことに対する、後悔・反省・戒め・教訓」ではないと思えてしかたないのである。

そこで、問題となるのは、自分の犯した罪はないがしろにし、エーミールという悪者をしてあげ、非難するという状況である。これは、物を書く者にとっては、卑怯な方法だと思えてならない。フェアでないのである。これを打開し、点であった問題点を結び、線とするには……。

作者ヘルマン・ヘッセのしかけ、奥深いからくりはないのか? 考

てみる。

①で述べたことをさらに発展させてみよう。「私」は作者、そして「僕」も作者。「エーミール」は別人? いや、「エーミール」も作者だとしたら……。主要登場人物は、すべて作者ヘッセを映したものでないかと考えてみるのである。

このことにより、②の疑問点も、解決できる。自分のことを印象の悪い人物として描くのであれば、多少自虐的にはなるが、アンフェアではなくなるはずである。同時に①の疑問点の解決の材料として、さらに意味をもつことにもなる。

あくまで、想像だが、ヘッセは自分が大切にしていた蝶(クジャクヤマムユ)を壊された経験を持っているのではないか。そして、その時壊した相手に対してとった行為が「陰険で冷徹で相手を理解しようとしないう大人びた嫌な」態度ではなかったのか。もし、そうであれば、このことは更なる大きなテーマへと思考を運ぶ。「自分が最も憎み・嫌う『陰険で冷徹で相手を理解しようとしないう大人びた嫌な』態度を自分がしてしまっていた。」というパラドックスである。

そのような自分の代弁者として、「僕」、「エーミール」、「私」がいたのではないだろうか。

#### ◎エーミールと符合するヘッセは存在するのか?

その1: 先生の息子 エーミール。宣教師の息子 ヘッセ。

その2: ヘッセが使っていた書き物机の上に立てかけられたヘッセが収集したと思われる蝶の標本にみられる片羽のとれたクジャクヤマムユ。「少年の日の思い出」のストーリーに照らすと、壊れたクジャクヤマムユが残っているとすれば、エーミールのところではないか。



作者ヘッセがエーミールの立場で思い、するだろうこと。また、「僕」の立場で思い、してしまうだろうこと。これを、客観的な「私」のいる場面で上映して見せていると思えるのである。

人間は、愚かなものである。どんなに誠実に公正に自分勝手にならぬよう生きようと心がけても、気づかぬうちに相手を追い詰めたり、しかたがないと見切ってしまったたり、都合のいいところで妥協してしまうものである。生きとし生けるものその命の重さに違いはないと、口にしながら、踏み殺したアリについては、見えなかったのだからしかたないと、自らに都合よく思うのが常だ。人間の抱える「命題」は、いつの時代、いつの世にも存在しているものなのだろう。人間というものが懐いてやまない本質的な問題(タブーとされる矛盾)に切り込んだのが、ヘッセではなかったか。